

遊泉寺鉾山と小松製作所の創設



創業者 竹内明太郎像(コマツ栗津工場70周年記念誌「MADE IN AWAZU」より)

江戸時代に沢村一帯(現小松市金平地区)の十村役であった石黒源次が、金平金山に次いで遊泉寺銅山の経営にも乗り出し、その後、この銅山は幕末期には「加賀藩所領」となり、藩の有力な財源ともなっていた。

やがて明治期になると土佐藩(現高知県)の元藩士竹内綱の長男である竹内明太郎が近代鉾山経営による開発を



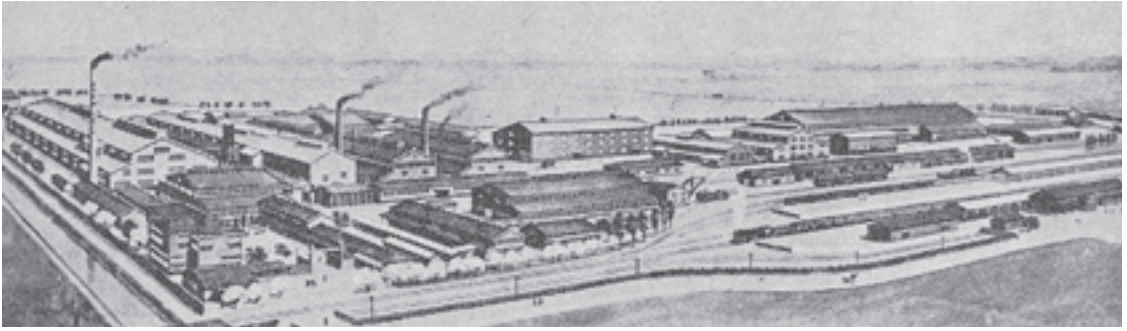
遊泉寺銅山跡地に残る真吹炉(コマツ栗津工場70周年記念誌「MADE IN AWAZU」より)

行い、最盛期の大正五年(一九一六頃)には従業員が一六〇〇人にも達し、彼らの家族も含めると約五〇〇〇人もの人々が遊泉寺地区に住み着いた。

実際、竹内が北陸線小松駅から遊泉寺までの約八キロにも及ぶ軽便鉄道を敷設すると、遊泉寺の町には学校、病



コマツ発祥の地、遊泉寺銅山精錬所全景(コマツ栗津工場70周年記念誌「MADE IN AWAZU」より)
銅山は1807(文化4)年に開かれ、明治から大正期にコマツ創業者竹内明太郎(竹内鉾業社長)の経営手腕で発展した。



小松製作所小松工場(昭和5年)(小松市立博物館提供)

院、郵便局、商店、娯楽施設などが立ち並び一大「鉾山町」として活況を呈した。

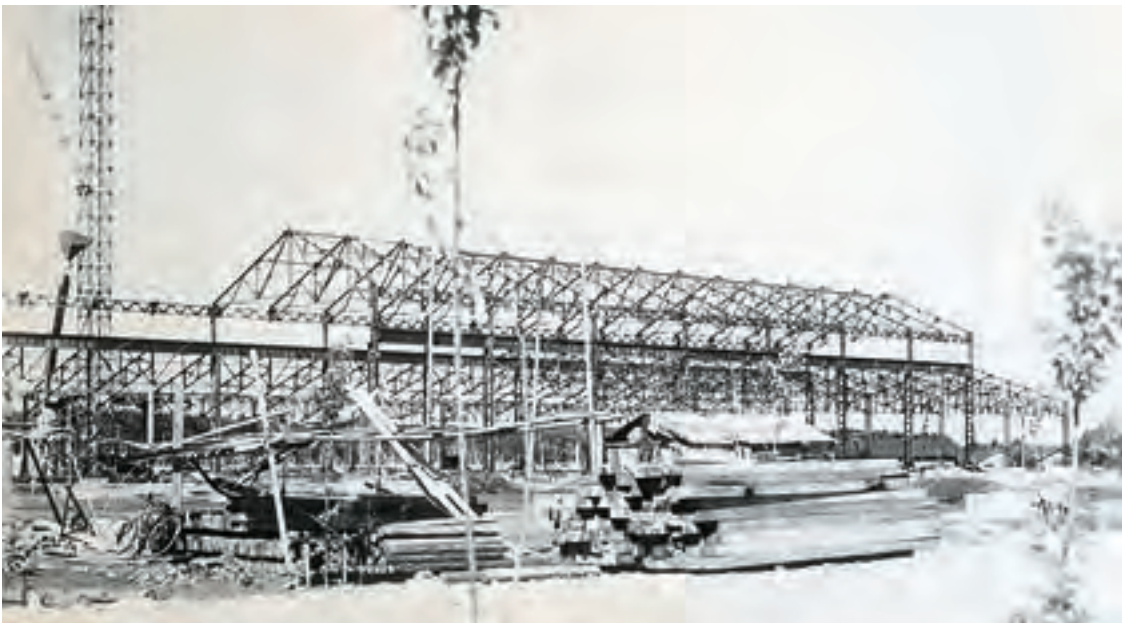
さらに竹内は青

少年に欧米先進国の最先端科学工業技術を学ばせ、人材育成にも力を注いだ。大正六年には小松駅に隣接して「小松鉄工所」を開設すると同時に、修学年限三年の見習生養成所も併設し中堅技能者を養成した。この養成所はその後昭和十年(一九三五)に工科青年学校となり、戦後は「小松高専」(現小松短大生産システム

ステージ)として幾多の有能な社員を世に送り出した。大正七年(一九一八)には、遊泉寺鉾山で使用する鉄鑄車両製造のため「小松電気製鋼所」も建設した。

しかし、遊泉寺鉾山は鉾脈が枯渇し、第一次大戦後の不況もあつて大正九年には閉山を余儀なくされた。ただ竹内は「鉾山は鉾脈が尽きれば終わりだが、工業技術は進歩と発展を続けられ、地域の活性化に大いに貢献できる」として、大正十年五月には「小松鉄工所」と「小松電気製鋼所」を合併し、新たに「株式会社小松製作所」を発足せしめた。竹内は相談役に就任し、初代取締役社長には東京商業貿易取締役の白石多士良が就任した。これが世界の「コマツ」のスタートとなった。

(平野 優)



建築中の粟津工場の建屋(コマツ粟津工場70周年記念誌『MADE IN AWAZU』より)